特別第２分科会

テーマ

防災活動とＰＴＡ

～大規模災害に備えたネットワークづくり～

会場

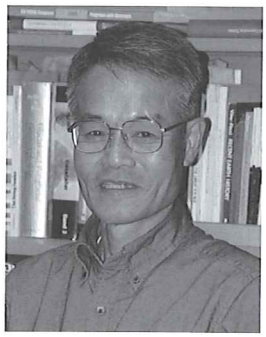
名古屋国際会議場白鳥ホール

基調講演・コーディネーター

名古屋大学大学院環境学研究科
教授

福和伸夫（ふくわのぶお） 氏

パネリスト



北海道大学大学院
地球環境科学研究院教授

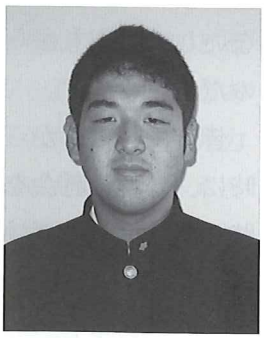
平川一臣（ひらかわかずおみ） 氏

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科科長・教諭

諏訪清二（すわせいじ） 氏

愛知県立宝陵高等学校
PTA 会長

池田信子（いけだのぶこ） 氏



愛知県立豊橋東高等学校３年生

岡田智八（おかだともや） さん

芳村麻由美（司会） ただ今から、第58回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会愛知大会特別第２分科会を開催いたします。私は、特別第２分科会の進行を務めさせていただきます、愛知県立豊橋東高等学校ＰＴＡ役員芳村麻由美です。よろしくお願いいたします。また、本日は手話通訳があります。それでは、開会にあたりまして、特別分科会の部会長でもあり、特別第２分科会運営責任者でもあります、愛知県立豊橋東高等学校ＰＴＡ会長柴田圭吾よりご挨拶を申し上げます。

◆開会挨拶

柴田圭吾（運営責任者） こんにちは。ただ今ご紹介を頂きました豊橋東高等学校ＰＴＡ会長柴田圭吾と申します。この愛知県に、そしてまた、数あるたくさんの分科会の中から当分科会に足をお運びくださいましたことに、心からお礼を申し上げます。さて、この分科会は、ご案内のとおり、防災活動とＰＴＡ活動、大規模災害に備えたネットワークづくりをテーマとして、前半が名古屋大学大学院教授福和伸夫先生による、「子どもたちが必ず出会う地震、どう伝えるか」と題する基調講演、後半がこのテーマに沿ったパネルディスカッションとなります。どうぞ本日はよろしくお願いします。

芳村麻由美（司会） 引続き、全国高等学校ＰＴＡ連合会を代表しまして、理事の板垣和生様よりご挨拶を頂きます。

◆全国高Ｐ連代表挨拶

板垣和生（全国高Ｐ連理事） 皆さん、こんにちは。はれやかな特別第２分科会の開催、誠におめでとうございます。全高Ｐ連の髙橋会長に代わり、謹んでお喜び申し上げます。この度の開催にあたりまして、講師の方、パネリストの方、コーディネーターの皆さん、また、会場入口にありました展示を拝見しましたが、宝陵高等学校の皆さん、作手高等学校の皆さんをはじめ、本当に素晴らしい展示をありがとうございます。私も、「ぱぱっと防災リュック」を作ってみたいと思います。また、本大会に向けて、今なお陰の苦労を惜

しまず外でも頑張っていらっしゃる方々に、最大の敬意を持って感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。愛知県の花は、かきつばたと伺いました。千年も前の「伊勢物語」の在原業平が詠んだかきつばたの歌に由来しているそうであります。「から衣　きつつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　旅をしぞ思ふ」旅の途中で、ふと家族を思う心を「かきつばた」という一文字一文字にかけて詠んだそうであります。本大会のメインテーマは、「絆」でありますが、ある意味で私たちは、あらゆる心と心のつながり、人と人との絆で結ばれていることに対して、気持ちを新たにしております。この部会を通しまして、まず私自身がしっかり勉強させていただき、子どもたちの未来のために、頑張っていく決意であります。大成功をお祈りして挨拶とかえさせていただきます。本当にありがとうございます。

芳村麻由美（司会） 次に、壇上の皆様のご紹介を、豊橋東高等学校ＰＴＡ会長柴田圭吾が申し上げます。

◆紹介

柴田圭吾（運営責任者） 壇上の皆様をご紹介申し上げます。最初に、当分科会の全国高等学校ＰＴＡ連合会担当役員の方をご紹介いたします。全国高等学校ＰＴＡ連合会理事、東京都の板垣和生さんと山梨県の切刀辰也さんです。全国高等学校ＰＴＡ連合会研修委員、長崎県の廣高信彦さんです。次に、当分科会の総責任者を紹介いたします。愛知県立豊橋東高等学校長竹本行雄です。同じく、愛知県立宝陵高等学校長大河まさ子です。続きまして、運営責任者の紹介をいたします。愛知県立豊川工業高等学校ＰＴＡ会長高垣博旨です。そして、私、豊橋東高等学校ＰＴＡ会長柴田圭吾です。よろしくお願いします。

芳村麻由美（司会） それでは、これから基調講演に移らせていただきます。本日の基調講演は、「子どもたちが必ず出会う地震、どう伝えるか」と題して、名古屋大学大学院教授福和伸夫様にご講演いただきます。それでは、福和伸夫様のご紹介を、分科会の総責任者の愛知県立豊橋東高等学校長竹本行雄が申し上げます。

◆基調講演紹介

竹本行雄（総責任者） 講師の福和伸夫先生のご紹介をいたします。大会要項の102ページに先生のプロフィールが掲載されていますので、ご覧ください。今、福和先生は、安全・安心な国や地域を実現するために、災害の軽減と環境保全についての研究を行っておられます。その際、真理の探求と問題解決とは、並び行われるべきこととお考えになり、「コト、モノ、ヒト」の三つ、すなわち、「コトの真相を明らかにする研究活動」そして「問題解決のためのモノづくりのシステム化」さらに「防災意識の啓発や技術者教育といったヒトづくり」の必要性を説かれ、幅広く、総合的に、文字どおり寸暇を惜しんで精力的に活動をしておられます。我が国内外で大地震が頻発して、不安の大きな現代、私たちは何を考え、何をなすべきかについて、思い悩んでおります。そうした時、貴重な指針となるお話をいただけると存じます。それでは、福和先生よろしくお願いいたします。

◆基調講演

福和伸夫（基調講演） 皆さん、こんにちは。ここまで随分堅く進行してきましたので、ここからは柔らかいお話に切り替えていきたいと思います。今日は、これから必ず地震災害を経験する子どもたちの世代のために、我々ダメな大人が、どうやって今の世の中を直しつつ、子どもたちに今の豊かな社会を受け継いでいくかということを一緒に考えていきた

いと思います。

今日は、多分嫌な話ばかりします。我々が地震災害に対していかにダメかということをお話しし、自己反省できるように、これから30、40分かけてお話していきたいと思います。まず最初に、子どもたちがこれから経験する敵というのは、どんなものなのかを見ておきたいと思います。これは私たちが十数年前に神戸で経験した揺れです。今日、神戸からいらっしゃった方々は、このような揺れを地面で経験されたはずです。今、「すごい」とおっしゃった方々は、皆勉強不足の方々です。これは、毎年、1月に放映されている揺れです。ただ、神戸市民全員がこの揺れを受けたわけではありません。これは、神戸の震災の帯の中にあったコンビニエンスストアでの地面の揺れです。今、ほとんどの人は、地面の上で生活はしていません。よく揺れる軟弱な地盤の上に住んでいる人も多いし、建物の高いところに住んでいる人たちもたくさんいます。神戸でマンションの高層階にいた人は、先ほどの何倍もの揺れを経験しているはずです。逆に言うと、地面で震度6弱くらいの揺れであれば、マンションの上に住んでいる人は、今くらいの揺れを受ける可能性があります。多くの人たちは、震度7の揺れなんて滅多に起きないから、関係ないやと思っているのですが、実は、私たちのほとんどは自分で造った揺れやすい家のために震度7の揺れを経験するということになります。具合が悪いことに、私たちは、本来住んではいけない場所に街を拡大しました。よく揺れる場所に、あえて住むようになりました。しかもそこに、高い建物を造って、自分であえて揺れる場所を作って住むようになりました。残念なことに多くの人はこのことに気付いていません。

では、強い揺れを受けると何が起きるか見ていきたいと思います。これは2階建ての木造戸建住宅です。2階建ての建物は、多くの場合、1階が平行四辺形につぶれて壊れていきます。2階建てだから1階の柱に大きな力がかかります。平屋だったら、こんなひどいことになりません。屋根しか支えていないので、そんなに簡単には壊れません。よく考えてみてください。戦前の建物はほとんど平屋でした。今は、2階建てが多いです。そして、1階を広々としたリビングルームにし、お座敷を造ります。2階には、小さな子ども部屋をたくさん造ります。そうすると、1階には全然壁がなく、2階は壁だらけ。とてもアンバランスな建物になってしまいます。家の中にいたら、こんな形で2階に押しつぶされることになってくるのです。2階建ての建物を造るようになったから、建物が壊れやすくなったということを、我々がどのくらい気付いているかということです。1階は大部屋で壁が足りない。2階は小部屋だらけで壁が多い。そして、柱と梁の接合部に一番力が掛かるのに、釘を使わないのがいい家だと今でも信じている人たちは、そこを十分に補強しません。そうすると、平行四辺形になって、建物が壊れていきます。神戸では、九割近くの方が、家が原因で命を落としていかれました。

次は、家の中はどうなるかみてみましょう。たとえ家が壊れず、生き残る空間が残ったとしても、家の中は危険物だらけです。例えば、造り付けの食器戸棚であったとしても、強い揺れを受ければ観音開きの棚から食器が飛び出します。今日いらっしゃる方々で女性の方は、よく今の場所にいらっしゃいます。寝室はこのようになります。家の中にも危険がいっぱいです。例えば、今日この席を選ばれる時に、ちゃんと上の天井を見てから自分の席を選ばれたかどうか、こんな危険な名古屋にいらっしゃって、いつ地震が起きてもおかしくないような場所に座る時に、天井に何があるかを気をつけずに座るなんて、

そもそも私たちが生きる力をなくしている証拠であるかもしれません。家の中には、吊り照明も額も大型テレビもピアノも食器戸棚も冷蔵庫も大きな家具もあります。こんなものは、戦前の地震の時にあったでしょうか。何もなかったはずです。

さて、今日いらっしゃっている皆さんにお聞きしたいと思います。皆さんの中で、例えば、冷蔵庫を倒れないように固定している方がいたら手を挙げてください。二人いらっしゃいました。たった二人です。これで、皆さん大地震で生き残れると思っているのでしょうか。そんな親に育てられた子どもたちは、生き残れるのでしょうか。結局、我々大人世代がダメになったから、子どもたちが生きる術を失ってしまうのかもしれない。こんなことが、徐々に実証されはじめてきています。そして、揺れがおさまった後は何が起こるでしょうか。日本の建物は燃えやすい建物です。昔であれば、家と家との間隔はとても開いていましたから、一軒燃えたって他の建物は燃えません。しかし、皆が一ヶ所に集まって、家を密集させて造ってしまったので、一軒燃えてしまうと、次から次へと燃えていくということになります。昔であれば、自分で消火していました。最近の日本人は、自分でやることをせずに、消防車が来るまでじっと待ってしまう。こんなことをしていたら、どんどんどんどん燃えていきます。そして、燃えはじめる建物は、壊れた家です。どうしてかというと、壊れた家の住人は、中で火が出始めても消すことができないからです。

皆さん、少し思い出してみてください。一年間にいくつお鍋を焦がすでしょうか。いつもなら、臭いがして自分で消します。臭いが分かり、自分が行動できるから消します。もし、家具の下敷きになっていたら、どうなるでしょうか。消す人はいなくなります。だから、壊れた家から火が出ます。ですから、耐震性がない住居がたくさんある住宅地に住むことは、そもそも間違っています。もらい火をするということになります。街ぐるみで家を壊れないようにしないと、まるごと燃えるということが分かります。今は住宅密集地にしてしまいました。だから、延焼します。ところで、火を消してくれる消防士さんは、今この時間、名古屋市内で何人働いているかというと、700人くらいしか働いていません。200万人以上を守るために、700人しか働いていないのです。この会場には、今700人いらっしゃいます。こんなにたくさんいると助けてもらえないのです。

この名古屋市は、日本でも有数の大きな街です。でも、今何かあった時に、駆けつけてくれる救急車の数は、34台です。今何かあった時に、119番通報しても、119番を受けてくれる人の数は10人です。私たちが持っている災害と戦う力というのは、これっぽっちしかないということを理解して、皆さんは我が家の対策をしているでしょうか。あくまでも我々が持っているのは、平時のための戦力です。来たるべき東海大地震、東南海地震では、この愛知県の場合には、普段の火災の発生数の10年分の火災が一日で発生します。これは、絶対に消せないものです。ということは、国民全員が消防士になった気持ちになり、そして、火を出さないようにする。こういうことをこの地震群を必ず経験する子どもたちに伝えておかないといけません。

これは、神戸の地震の時、1時間半後に流れたラジオでのインタビューの様子です。少し読んでみたいと思います。「それからすぐこちらに、こちらの住民の方で、手に大怪我をされた方がいらっしゃるのですが、これはどうして怪我をされたのですか」「ガラスが割れて」「お怪我はそれだけですか」「手だけやね」「そうですか」「この火事はいつごろから出たのですか」「これ、どんなやろう。地

震が揺れだしてから、1間なしからもう、ちょうど10丁目のその角の家から2軒目の、その裏の裏かららしいけれどね。そこら近辺から火の手が上がって、私の家は全焼してしもうたけどね」「全焼したのですか。どこらへんですか」「10丁目です」「10丁目ですか。で、家族の方は？」「息子が1人。もう死んでいると思うね」「下敷きになって、出されんかったんですわ」「息子さん何歳」「38歳か」「まだ安否が分からない」「もう焼けたから、死んだと思いますわ」「はぁ」「もうちょっとね。足が出てるんやけど、後が出なかった。それに」「お父さんが、足まで掴んで引っ張り出そうとしたけれど、何かの下敷きになったんですか」「そうそう。その内、火が来たもんやから、『親父、逃げてくれー』言うて」「息子さんが、そうおっしゃった。はぁ、そのままで。」「目の前で見殺しですわ」というラジオの放送が流れました。これは、このお父さんにとっては非常につらいことです。だって、この家を造ったのはお父さん。自分で造った家で、息子さんが命を落としたということになります。これと同じ現場を、我々はこれから日本中で経験することになります。家が壊れるのにそのまま放っていたということが原因です。神戸は突発災害。これからの地震は来ることが分かっている地震です。

神戸の地震というのは、被災者約300万人くらいです。被害金額10兆円くらいで、10万軒くらいの家が全壊してしまいました。6400人の方がお亡くなりになりました。よく考えてみると、四川の地震とよく似ています。四川の地震の被害は、確かに全部10倍です。4500万人が被災し、87000人の方がお亡くなりになったり、行方不明になりました。ですが、よく考えてみると、中国というのは日本に比べると、10倍以上国土も広いし、人もいます。ということは、国力に対しての被害の割合というのでいうと、あんなに大きい四川の地震だって、中国にとっては、日本にとっての兵庫県南部地震くらいだというように思います。確かに、兵庫県南部地震は、とても大変な地震でした。しかし、日本は破滅はしませんでした。四川の地震があったって、今北京でオリンピックがやられています。それでは、私たちがこれから数十年の間に経験するだろう首都直下地震や、あるいは、東海・東南海・南海地震などがもし起きたら、その被害は、被災者の数は四川地震と同じくらいです。被害金額はずっと多いです。被災者の数が同じであるということは、1億数千万人しかいない国にとって、10倍の国と同じだけの被害が出たらどうなるでしょうか。国民の3人に1人が、被災するような地震に対して、手をこまねいて何もしないこの国の現状は相当やばいということが分かります。それと、神戸の地震と岩手・宮城の内陸地震と、地震の大きさは変わりません。でも、岩手・宮城では神戸と比べはるかに小さな被害です。ことは単純です。人が多く住んでいないからです。

すなわち、私たちはこんなことを学ぶ必要があります。四川や兵庫の地震は国にとってパーセントの地震です。しかし、東海・東南

海地震が起きたら、世界中頑張っても、全然対応できないくらいの被害のボリュームです。人が住んでいるかどうかで、被害の大きさは違います。そして、私たちは近い将来に、日本の何十%かがやられる地震が来ることを知っています。でも、ほとんどの大人は、何の行動もしていません。現に、この会場で冷蔵庫を止めてくれていたのは、たった2人です。ここには1000人くらいいるのですよ。冷蔵庫が倒れたら、多くの家庭では、冷蔵庫は台所の出口にあります。倒れると出口が失われます。そこに、食器戸棚からガラスがわっと落ちます。血だらけです。怪我で血がでたくらいでは、命に別状がなければ、お医者さんは手当をしてくれません。そんな暇がないからです。全部自分で何とかしなければいけないと、理解しておかなければいけません。

以上のようなことを頭に置きながら、この30年間の地震発生場所を見てみましょう。こんなにも地震が来ています。そして去年、今年とさらに増えてきました。さて、皆さんの中には、もう赤色でやられてしまった所から来た人もいらっしゃいます。その方々は、大変だったと思います。でも、もっと大変な人たちがいます。まだ経験していない人たちです。こういった場所で地震が来るということが分かります。まだ揺れを経験していない人たちは、今日、揺れを経験をした地区の人たちから少しでも経験談を聞いて、何をしておくべきかと学んでおくべきだと思います。ただ、経験談を聞く時に、気をつけなければいけないことがあります。死んでしまった人の経験談は聞けないということを頭に入れておいてください。死んでしまった人の経験談は、つぶれる家や倒れる家具は絶対に許さないと言うはずですが、それを除いた経験談しか聞けません。さて、残っているのは三大都市圏です。そのような地震が起きたら、何が起こるでしょうか。過去が教えてくれるはずであります。

1703年、元禄時代に、関東地震が来ました。大きな地震でした。大正の関東地震より大きかったです。4年後、超巨大地震がやってきました。1日で、東海地震、東南海地震、南海地震がきちゃいました。さらに、49日後、富士山も噴火しちゃいました。今同じことが起きたら、どれが起きても、日本はきっと破綻します。これで数百兆、これで百兆、富士の噴火で首都機能消失となります。でも、当時は破綻しませんでした。それは、それぞれの藩ごとに自主独立でしたから、別に他のところやられても関係ないよと、それぞれの地域ごとに自己完結できていたからです。今のように、大都市に頼りきった日本では、一つこけただけで連鎖して皆終わります。その次の地震はは、東海地震と南海地震が1日の間で起きました。その前後には、7年前に善光寺、連鎖して1年前に小田原で、半年前に伊賀で、翌年にお江戸で、そして飛騨でも地震がありました。翌年のお江戸での地震は、篤姫様のあの

ドラマで出てきた地震です。この地震で、大きく日本の政治も動いたはずです。水戸藩がお屋敷を構えていたところは、地盤の良くないところで全壊してしまいました。ですから、尊皇攘夷派は力を失いました。その後、安政の大獄へと行ったはずです。西日本全体が被災しました。ちょうどこのころに、ペリーたちもやってきました。社会が混乱して明治へと変わったのではないでしょうか。その次はもっと大変だったと思います。1923年に関東地震が起きて、その後は地震だらけ、そして戦争が始まり、戦争が終わった。

年表をよく見ながら、そこに地震がいつ起きたかと書いてみると、意外な関係に気がついてきます。しかし、そんなこと学校の先生は、何も私たちに教えてくれません。理由は、学校の先生が縦割りだからです。こんな縦割り教育ばかり受けていたら、生き残るための力を子どもたちは持つことができません。1回前の地震の時に何が起きたでしょうか。日露戦争と第一次世界大戦に勝って、大正デモクラシーになったところで関東地震がやってきて、10万人の人が命を落とし、当時の国家予算の3倍のお金を失ってしまいました。ですから、1週間後には、モラトリアム、経済的な対処と、治安維持に関する緊急勅令を出しました。これでも足りないので、1ヵ月後に震災手当てを出しましたが、これが不良債権化して、後に金融恐慌を起こしました。この治安維持に関する緊急勅令は、2年後治安維持法に変わってしまいます。そして、ラジオ放送が開始されました。これは、関東地震で海外の方々を大虐殺した反省でデマを出さないように、始めたはずです。25年の5月に北但馬地震、そして、27年に北丹後地震が起きて、金融恐慌はその1週間後です。北伊豆地震が起きて、満州事変、そして満州国を建国して、5.15事件で、三陸沖地震、そして、国連脱退し、2.26事件、宮城県沖地震で、日中戦争で、国家総動員法で、日向灘地震がきて、太平洋戦争がはじまって、ミッドウェー海戦で負け、鳥取地震が来て、サイパン・グアム・レイテの敗戦が続いていて、東南海地震がやって来て、これで軍需工場がぼろぼろにやられて、さらにその1週間後から、ナゴヤドーム球場のある場所にあった三菱発動機が初めて空襲でやられ、そのちょうど1ヵ月後に、三河地震がやってきて、そして、今日豊川工業高校の方々、あるいは、豊橋東高校の方々がいらっしゃる町にあった、豊川海軍工廠が大爆撃を原爆の翌日に受けて、皆さんの高校の先輩たちを含め、2、3千人、命を落とされました。しかし、学校はこれらのことを教えてないですよね。お父さん、お母さんもいけませんね。そんな経験があっても教えていない。そして、その翌週に敗戦を迎え、翌年南海地震、2年後福井地震で、その後朝鮮戦争が勃発して、軍需景気に沸いて、どんどん、どんどん経済成長を遂げて現代に至るという歴史だったと思います。

これを見たら、ぞっとします。その時、津波でやられた場所、これは、東南海地震で津波でやられた場所、三重県の尾鷲です。今日も、尾鷲からみえた方がいらっしゃるように思います。これだけ津波でやられました。そして、また作り直してしまいました。必ずやられます。きっと今度は、前より大きな地震ですから、もっとひどくやられます。さらにひどいことをしています。命を守った瀬木山、ここに津波から逃げました。でも、これを削り取りました。そして、埋め立てました。埋立地に火力発電所を造りました。隣に、タンク群を造りました。このタンク群は、中京地区への石油の中継基地になっていますから、この名古屋地区はここが途絶えると、非常につらくなります。こんなことが起きます。タンク群の中の油は、揺すったら漏れ出

るかもしれません。漏れ出た油は津波が運びます。そうすると、奥尻島の青苗漁港のように火に包まれてしまうかもしれません。

というようなことを想像している日本人が、一体どれだけいるのでしょうか。このような連鎖がどんどんどんどん進むかもしれません。しかし、戦後私たちは日本中にこのような街をたくさん造ってしまいました。高度成長させるという旗印の下に、実は災害に対してすごく弱い街を作ってしまったかもしれません。我々はもう、次の地震だらけの時代に入っているように思います。

1993年くらいから見てください。毎年のように地震が来ています。それまでは、50年間これだけしかありませんでした。皆さんは気がついているのでしょうか。そして、もっと具合が悪いというか、具合が良かったというか、1993年以降の地震で、平日昼間に起きた地震は、鳥取県西部地震だけなのです。ですから、子どもが血だらけの様子を私たちは見ていないのです。このため学校の耐震化を放ってました。ひどい話です。しかし、四川で平日昼間に地震が起きてしまったのを見て、皆さんが騒ぎ始めて、それに立っていられなくて、政府が学校の耐震化に動きました。そんなことでは本当はいけなくて、1995年にもっと気がついて動いていなければいけませんでした。

今見てきたように、どうも我々自身に問題があります。戦前の地震の時は、明治だって4000万人しか日本人はいなかったのです。3倍に水ぶくれです。昔は、いい場所に皆住んでいました。揺れない場所です。災害危険度の少ない場所です。そして、建てていた家は平屋です。屋根も軽いです。平屋は多少壊れても、人はそんなに死にません。揺れも小さいし、そんなに壊れない建物、そもそも家具なんてありません。電気もガスも水道も何も使っていません。ですから、地震が起きた後、広い敷地の庭に掘っ立て小屋を造って、それで普通に生活が始まりました。そして、生きる力もたっぷりでした。特に1回前の地震の時は、戦争中に来ましたから、毎日防空訓練ばかりしていた人たちです。ですから、すぐに助けられました。しかし、神戸の地震では、ぼっと見てた人が多かったです。かつては、大家族でしたから、家の中で皆助け合いました。そして、災害が怖いということを、家の中で伝えていました。今のおじいさん、おばあさんは、何も伝えていません。お小遣いを渡しているだけです。地域の中での助け合いもありました。

それでは今は、どうでしょう。今は、こんな時代です。すごくよく揺れる場所に出て行きました。これは、人口が都会に集中したからです。それでも足りないので、背を高くし、密集させました。よく揺れ、よく燃えるようになりました。家の中には家具だらけ、家具も止めずに家具だらけ。そして、電気、ガス、水道、電話、インターネット、地下鉄、高速道路がなければ生きていけない社会に変えてしまいました。子どもたちの生きる力は、ぼろぼろに弱ってきています。

そもそも、自然が怖いと思っている日本人がいなくなってきました。皆、自然はきれいだとか、環境に優しいとばかり言うようになってきてしまいました。核家族ですから、弱者だけの世帯だらけです。しかし、大災害時に、彼らを救う余裕はないはずです。地域のコミュニティも失ってしまいました。

今日、東京からいらっしゃった方々には大変申し訳ないのですが、東京の悪口を今から申します。ここが東京駅です。これは明治時代です。これは江戸時代です。（映像による紹介）こんなに海が広がり、そこら中にお堀がありました。この場所に首都を作ったことは良かったのかと感じます。地名を見てみましょう。谷、谷、田んぼ、川、田んぼ、橋、

岸、堀、橋、橋、田んぼ、田んぼ。そして、現在はお堀や海をこれだけ埋めてしまいました。埋めてしまったところを、1923年の関東地震が襲いました。関東地震でよく揺れたのは、埋めてしまったところだけです。そもそも、関東地震というのは、東京直下の地震ではありませんから、本来東京はあまり関係なくていいはずです。しかし、我々が軟らかい地盤で覆ってしまったので、そこだけがよく揺れました。ですから、人災であるとも言えます。このことを私たちがよく知っていれば、今このようなよく揺れる場所には建物を建てないという選択もできました。

しかし、何を建てたかというと、この場所に建っているのは東京消防庁、その隣にあるのはもっと最悪で、気象庁の本庁舎です。これを脇から撮った写真がこれです。ここに消防庁、気象庁がありますが、これは、某新聞社の本社ビルです。これは、某商社の本社ビル、これは、某新聞社がここにもってきた本社ビル。ここは、某商社の本社ビルであります。その隣は、某銀行の本店。そして、その南側の真赤のところは、大手町、丸の内、有楽町、日比谷、新橋という日本のビジネスの拠点、そしてこの周辺の赤いところは、全部背の高いビルで覆いつくしてしまいました。そして、一番上の一番よく揺れる場所にいるのが、一流会社の社長さんたちであります。一番上に社長さんがいるような会社は、本当に危機管理ができていない会社です。

これだけ私たちの国は、皆馬鹿になっていると分かります。ここには、日本で一番大事な肝っ玉があります。そこの場所、83年前はどんな感じだったのでしょうか。今のように、真赤な場所で地盤が軟らかいから、地盤がこんなに変状してしまいました。そこに建った立派なビルは、途中の階がつぶれています。まるで、これは神戸の地震の時に、ビルの途中階がつぶれていたのとそっくりです。そして、住宅はこんなふうに壊れてしまいました。そして、壊れた住宅から火が出たわけです。ちょうどお昼時の地震でした。遠くに見えるのは、浅草十二階で、当時の一番の超高層ビルでした。よく上のほうが揺れたので、上のところだけが、吹っ飛んでいます。周辺にもくもくしているのは、火事です。そして、東京全部が燃えていってしまいました。そして、この燃えさかる炎の中を、市民の人たちは、大八車に家財を乗せて逃げ惑いました。こんな感じです。そして、広い広場に逃げていったのです。しかし、その広い広場に火の竜巻、火災旋風が襲ってきました。このようにやっと逃げてこられたと思ったところに、火の竜巻がやってきて、全部丸焦げになりました。ここには、3万以上の焼死体が転がっています。

これを反省して、私たちの国は、建物を燃えないようにしたり、あるいは、道路を広くするというようなことをしました。大都市であれば、このようなことが起こると思っていないといけません。このようなことを私たちは、きちんと伝えてきているかというと、大変心配です。また、東京の地図を別の見方をします。標高を表しています。黄色が高いところ、青が海抜ゼロメートル以下です。この絵（関東地震の震度分布）とそっくりです。すなわち、関東地震でよく揺れた場所は、結局地面が低い場所、軟らかい地盤の場所ではないかということです。しかし、日本の建物は、どこに造っても同じ建物を造っています。皆、地震と戦うことを忘れて、法律としか戦ってないためです。法律は、人間が定めた最低限守らないといけないことです。我々が地震のことを分かっていれば、こっちに建てる建物は、この建物の何倍も強く造らなければいけないに決まっています。ですが、姉歯さんの話題ばかり議論していました。敵の強さのことを考えることを忘れています。

このように鉄道を通しました。このように武蔵野台地の東を通して、当時の海岸線を通しました。どうしてかと言うと、蒸気機関車だったからです。火を吐いて煙を吐く、来てもらったら困る乗り物だったので、一番街の端にもっていったのです。ですから、駅の名前は最悪です。窪。谷、谷、谷、橋、橋、橋、水、原っぱ、橋。井戸、井戸、川、船、船、船、津、田、沼、川、稲。津田沼なんて、最高の名前です。谷津村と久々田村と鷺沼村という三村合併で作った、ダメな名前だけを組み合わせた地名なのです。これは、当時の人たちが災害危険度を残すためには、地名は大事だと考えたからです。一方で、今の東京人はどのような地名を作ったかというと、西東京などという馬鹿な地名をつくりました。西東京とはどういう意味でしょうか。西にも東にも京があり、股裂きの京です。これが、国の建物がある場所です。国の人たちは知っています。偉い人たちも皆、知っています。それに対して、どうして私たちはこんなにダメになったのでしょうか。理由は分かります。今、写真を写している人たちに問題があります。分かりますか。これをよく理解して、写真を撮ってください。皆、写真を撮っている人たちの会社が、自然災害のこわさを忘れたからです。この人たちの記事を読んでいる国民は、どうなるのでしょうか。これは、具合が悪いことが分かります。さらに、一流会社はどこにあるでしょうか。東京の人は、貯金してもダメ、保険に入ってもダメということが分かります。

さて、このような人たちの建物を造っている人たちは、どうでしょうか。知恵がない場所にばかり建物を造っています。このようなことを、我々は真剣に考えているでしょうか。我々は、六十年間は地震が来ないと思っていたから「いけいけどんどん」でよかったのかもしれません。そのおかげで、ここまで豊かになりました。我々は完全に自然のこわさのことを忘れて、「いけいけどんどん」をこの60年間してきたおかげで、こんな素晴らしい豊かな時代を作ることができたわけです。しかし、残念ながら、これからは地震が来てしまうのです。この状態でバトンタッチしたら、次の世代は最悪であることが分かります。

ですから、そろそろ我々自身、大人がちゃんとしっかりして、このことに気がつき、子どもと共に、壊れない国に変えないといけないということになってまいります。例えば、1回前の東南海地震で、一番よくやられた所は、黒い色です。今いる場所は、ここです。私たち、この地震の時には、1000人しか人を失いませんでした。今度は、1万人の予定です。どうしてかというと、昔はここに人があまり住んでいなかったからです。皆、田んぼでした。今、住宅密集地です。ですから、10倍人が死んでしまうのです。それだけではありません。火力発電所を造ったのは、皆その場所です。国民の人たちは、皆原子力発電所のことばかり騒いでいます。この原子力の建物は、火力の建物の3倍強いのです。この場所の揺れは、この場所の揺れより小さいのです。ずっと揺れが強くて、普通の建物でしかない、これに日本中が頼っているのです。一方で、電力自由化と言って、電力を安くしろ、安くしろと国民が言うから、安全にお金を投入しにくくなっているように思います。例えば、中部電力管内で言うと、ここでだけで電気を造っています。ここで原子力、ここで火力です。ここをやられただけで、全部が死んでしまうということです。ここに富士川が流れています。東は50Hz、西は60Hz、そこの間を周波数が変換できる能力が、日本は100万kWしかありません。2億kW使っている日本で、100万kWしか融通ができません。どうして、こんな大事なこと

を誰も議論しないのか。それは大人に問題があります。これが、電気を作っている県。これは、電気を貰ってばかりいる県です。ここに住んではダメだということが分かります。自分の地域がやられなくても、他の地域がやられたことで、生きていけなくなる街だということが分かります。

場所によって、相当揺れ方が違うことも見ていただきます。これは、今の発電所があった場所です。それから、これは大きな会社の工場が集中している場所です。それから、大きな会社の本社がある場所です。これが、名古屋の今のこの場所だと思ってください。東海地震、東南海地震がこれからやってきた時の、揺れを私たちが予測してみました。同じ地震でも、どれだけ場所によって揺れ方が違うかをじっくり見てください。これによって、住む場所が大事だということが、一目瞭然分かると思います。ここは全然揺れてはいません。ここは最悪です。ここは、背の高い建物を造ってはいけない場所だとよく分かります。しかし、皆震度マップばかり見ているから、このことが感覚的に分かりません。ついでに、これは地面の揺れですから、建物の中にいたらどうなるかということも見てみましょう。先ほど、一番よく揺れていた碧南という場所、地面にいるとこれ、2階建て、5階建て、10階建て、20階建て、40階建て、これで皆さんどのような建物に住むべきかということが分かってまいります。地面にいるか、5階建ての中層マンションにいるか、10階建てにいるか、超高層マンションがいいか。まだ、これからです。このようなイメージはしているでしょうか。日本人全員が、何も考えないようになってきました。私たち、超高層ビルを建てる時は、私は建築屋ですが、地震の時に、超高層ビルの背の高さの100分の1揺れてもいいように設計しています。名古屋駅前に高さ250メートルのビルがあります。あれは、どのくらい揺れることを前提にしているかというと、このくらい揺れます。今すごく揺れていました。（模型を使って実演・説明）

さて、そのように揺れると建物の中はどうなるでしょう。起きていれば逃げられると思っている人たちはたくさんいます。残念ながら、起きていても逃げられません。これは、南海地震が起きた時に、神戸にある30階建ての建物の中では、どのような揺れになるかということを、今年の1月に実験した結果です。意外と怖い状況であるということが分かると思います。このように揺れて、一発でどんです。冷蔵庫を止めている人は、たった2人でした。先ほどチェックしました。今日の幹事校の豊橋東高校、職員室は家具止めしていないと思います。ということは、先生方血だらけです。会長さんの所は、家具を止めていますか。よかったです。会長さんだけが生き残るかもしれません。

我々は、このようなことを70年前に学んでいたはずです。「天災と国防」（寺田寅彦著）という文章です。少し読んでみたいと思います。

「いつも忘れられがちな重大な要項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増すという事実である。

人類がまだ草昧の時代を脱しなかったころ、頑丈な岩山の洞窟の中に住まっていたとすれば、たいていの地震や暴風でも平気であったろうし、これらの天変によって破壊さるべきなんらの造営物をも持ち合わせなかったのである。もう少し文化が進んで小屋を作るようになっても、テントか掘っ立て小屋のようなものであって見れば、地震にはかえって絶対安全であり、またたとえ風に飛ばされてしまっても復旧ははなはだ容易である。とにかくこういう時代には、人間は極端に自然に

従順であって、自然に逆らうような大それた企ては何もしなかったからよかったのである。

文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そうして、重力に逆らい、風圧水力に抗するようないろいろの造営物を作った。そうしてあっぱれ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然があばれ出して高楼を倒壊せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を滅ぼす。その災禍を起こさせたもとの起こりは天然に反抗する人間の細工であると言っても不当ではないはずである、災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするように努力しているものはたれあろう文明人そのものなのである。

もう一つ文明の進歩のために生じた対自然関係の著しい変化がある。それは人間の団体、なかんずくいわゆる国家あるいは国民と称するものの有機的結合が進化し、その内部機構の分化が著しく進展して来たために、その有機系のある一部の損害が系全体に対してはなはだしく有害な影響を及ぼす可能性が多くなり、時には一小部分の傷害が全系統に致命的となりうる恐れがあるようになったということである」

74年前に、この文章が書かれています。この74年間の間に、どれだけさらにそれを悪化させたかということを頭に入れながら、もうすぐ地震がやってきてしまうタイミングになった今、この国をどう変えるべきかということを、真剣にＰＴＡとしても考え、子どもたちに何を託すべきかということを考えるべきかと思います。

これから30年間の間に、こんな確率でこんな地震がやってきます。その時の被害は、私たちの国では耐えられない被害であることを知っています。私たちのもっている力は全く足りません。ですから、社会は破綻するということが分かっています。それを防ぐために、3年前に、小泉元総理は地震防災戦略というものをつくり、10年で被害を半減、耐震化率90%にするということを約束しました。国民全員の徹底的な意識改革が必要だということになったのです。ですが、3年間経っても、この国はほとんど動いていません。それは、誰に問題があるかというと、政府の問題ではありません。国民の我々一人一人が、全くなっていないからです。しかし、国民を叱ることのできる人が、この国にはいません。マスコミも誰も叱れません。お得意先が国民なので、今国民を叱ることができない社会にしてしまいました。しかし、これをやらなかったら私たちはおしまいです。そこで、国民運動をつくるということを2年前に皆で決めました。災害被害を軽減するための国民運動です。そのために、とにかく分かりやすい道具をつくろう、そして分かりやすくアピールしようということで、こんな2つの壊れそうな建物と壊れない建物2つを首相官邸に持ち込んで、実験をしてまいりました。ちゃんとうまく小泉さんの方に壊れてくれました。そして、小泉さんはけがをすることなく、小泉さんはにこっと笑ってくれました。驚いてもくれました。本当に素晴らしい反応をしてくれました。そして、こんな簡単な2階建ての紙製のおもちゃで、ニコニコニコニコ笑いながら、どのような建物が強いかどうかということを、簡単に分かってくださいました。こういった教育が実は必要で、理論ばかり学んだって、感覚で分からない勉強は残りません。ですから、それを是非進めていく必要があります。そして、今のような教育、あるいは啓発活動は、地域によって差があります。これが地震保険加入率の都道府県別と小中学校の耐震化率の都道府県比較です。私

たちが今いる愛知は、今こんなに素晴らしいのです。皆さん自分の住んでいる場所をよく見ていてください。こんなばかな県もありますから、どことは言いませんが、両方とも山がついています。これだけ違うということを理解しつつ、皆さん親の責任であるということも、認識しつつ動いていただきたいと思います。結局は家庭が動くかどうかです、でも家庭を直接動かすことはとても大変です。だから皆さんがいらっしゃる学校、地域を通して、家庭を変えて、この国が滅んでいかないようにすぐにでも活動を始めないといけないと思います。特に学校はとても大事な場であります。とてもたくさんの先生方もいます。我々は命を守る教育、歴史を知る教育、備える教育、社会と地域を知る教育、それは既存の教科で十分にできるわけですから、既存の教科の中に魂を吹き込んで、この国が壊れないようにする必要があります。そして私たちが昔の人たちと同じようにこういったことの大事さを理解し、本当に大事な、口先だけではない生きる力を育てるための教育を再度していく必要があると思います。以上で終わります。どうもありがとうございました。

芳村麻由美（司会） 福和伸夫様、貴重なご講演、誠にありがとうございました。会場の皆様、福和伸夫様に今一度、盛大な拍手をお送りください。

以上をもちまして、基調講演を終了いたします。

河村美知代子（司会） ただ今からパネルディスカッションを行います。私はこれより進行を務めさせていただきます愛知県立宝陵高等学校教頭河村美知代子です。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、特別第2分科会運営責任者であります愛知県立豊川高等学校ＰＴＡ会長高垣博旨さんより挨拶並びに、壇上の方々のご紹介をいたします。

◆運営責任者挨拶、紹介

高垣博旨（運営責任者） 皆さん、こんにちは。愛知県立豊川高等学校のＰＴＡ会長の高垣博旨と申します。ようこそ、愛知県にお越しいただきましてありがとうございます。これから行われるパネルディスカッションでは、研究者、教育者、親、生徒という個々の立場から災害に負けない力について、お話をしていただこうとしております。それでは、壇上の皆様のご紹介をいたします。コーディネーターの名古屋大学大学院教授福和伸夫様です。続きまして、パネリストの方々をご紹介いたします。皆様から向かって左側から申し上げます。北海道大学大学院教授平川一臣様です。兵庫県立舞子高等学校環境防災科科長諏訪清二様です。愛知県立宝陵高等学校ＰＴＡ会長池田信子様です。愛知県豊橋東高等学校３年生岡田智八さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

河村美知代子（司会） それでは、このあとの進行につきましては、コーディネーターの福和伸夫様にお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

◆パネルディスカッション

福和伸夫（コーディネーター） それでは、皆さん、今から１時間ちょっと、一緒にパネルディスカッションを始めていきたいと思います。今日のパネルディスカッションのタイトルは、「防災活動とＰＴＡ～大規模災害に備えたネットワークづくり～」です。今まで、私が嫌な話ばかりして、徹底的に脅してしまいました。これから、パネラーの皆さんが、そんなことはないから安心してねと解決策を皆さん提示してくださいます。さっきまでは問題提起の時間、これからはどうやったら、こういった状況を克服できるかという時間です。日本中から指折りのパネラーの方々４人が来てくださっています。順番にお話をして

いただくことを予定しております。今ご紹介がありましたように、平川先生は地理学の立場で、地球、あるいは地質を中心に研究をされつつ防災活動も随分されています。わざわざ北海道から来てくださいましたが、どうして来てくださったかと言うと、一番向こうの岡田君の大先輩だからということがあるようです。もとは、豊橋でお生まれになったということをお聞きしました。諏訪先生は、日本一熱き高校の先生と言われている方で、おひげの雰囲気からも分かるように日本中飛び回って、防災は大事だよということをお話してくださっている大先生です。防災教育というと、必ずおひげの先生を見ることになります。あのおひげさんと、諏訪先生という名前を一致させておいてください。今日は幹事の学校の宝陵高校のＰＴＡの会長さんの池田さんが加わってくださっていますが、実社会では池田先生という立場でもあるようでありますので、先生の立場とＰＴＡの立場と、親御さんの立場、あるいは学校を支えるＰＴＡの立場といろいろの立場からお話しをしてくださると思います。先ほどの４人の方々と、一緒に話をしていて、一番おもしろくいろんな話をしてくださったのが、池田さんでありました。そして今日は唯一人、必ず地震と遭う人、岡田さんがやってきてくれました。彼だけは本当に確実に遭います。今日のような嫌な話を聞いて、彼はどうやって友達と一緒に生きぬいていくかと話してくれるはずで、同時に子ども代表として今の大人たちにいっぱい文句があるはずですから、その文句を一杯言っていただこうと思います。今日、私に与えられた時間は、全体で70分です。発言は４回程度にさせていただきます。一回目は２分、自己紹介＆防災教育とのかかわり、２回目は10分、今日最も強調したいこと、３回目２分、他の方の話を聞いて、と指示されていますが、全部なしにします。そして順番も決められていますが、無視します。まず最初に岡田君に話してもらおうと思いますが、岡田君、心の準備ができていないと言っていましたよね。これこそが危機対応。では、岡田君、しゃべってくれますか？お願いします。

岡田智八（パネリスト） こんにちは。まず私たちの学校での防災についての取組を発表させていただきます。豊橋東高校は愛知県の東部、豊橋市に位置し、創立100周年を迎えた学校です。生徒たちは大学進学を目指しつつ、部活動にも励んでいます。私は東高校のボランティア組織、「五つ葉会」の会員です。「五つ葉会」は生徒会の下部組織で、会員はそれぞれ部活動に所属し、生徒会と連携を取りながら活発に活動しています。私は昨年度、愛知県教育委員会主催の高校生防災セミナーに「五つ葉会員」である友人と、４人で参加しました。この防災セミナーというのは、福和先生を初めとする、専門家方の講義や、実技演習を行う、全５日間の防災研修です。夏休みには２泊３日で、淡路島や、神戸を訪れ、人と防災未来センターの見学をした

り、舞子高校の生徒の方とディスカッションをしたりしました。私たちが行った取組は、主にこの6つです。1　全校と視覚障害者の方へのアンケートの実施、2　災害についての展示発表、3　ＡＥＤ講習会、4　防災対策課への訪問、5　新避難訓練の提案、6　はるかのひまわり、以上です。では、各項目について説明していきます。まずはアンケートについてです。昨年、全校と視覚障害者の方へアンケートをとりました、主な目的はこの2つです。先生・生徒の防災意識の確認、障害者への震災とのかかわり方を知る。アンケートの結果、災害が起きたときの対応について話し合っている家庭は、3割にも及ばず、1割の生徒が避難場所を知らず、大地震の時に自分の家が安全かどうかを知らない人が半数いることが分かりました。また、知覚障害者の方からは、周りが見えないため、ストレスがたまり、プライバシーが気になるなどの理由から、集団避難生活に不安をもっていて、危険と言われている家からも出ることができないのではないか、という貴重な意見を寄せていただきました。アンケートの結果の状態は、受付で配布させていただいた資料に掲載しておりますので、ご覧ください。次は防災展示です。昨年の学校祭の2日目に、私たちは防災展示を行いました。「五つ葉会」で例年開催しているバザーの隣の教室で、防災展示を行い、Ｂ紙など約15枚で発表しました。防災展示と並行して講習会も行いました。消防署に勤めていて、東三河救急クラブに所属している方が私たちの意見に賛同してくださり、ボアンティアとして同行してくださいました。防災対策課への訪問です。私たちは震災が起こった際の、身体障害者の方への行政の対応を知りたくなり、それについて質問すべく豊橋市役所を訪問しました。防災対策課を訪れ、担当者の方にお聞きしたところ、豊橋としては健常者と同様に自宅の耐震化を呼びかけているとのことでした。その時は、行政も被災者であり、特別扱いはできず、自助努力によって数日間しのいでもらえれば、その後段階的に福祉避難所へ移ってもらえるようになっているそうです。防災訓練についてです。兵庫県の舞子高校の生徒とのディスカッションで、舞子高校の防災活動に対する取組のレベルの高さに感動すると同時に、本校の防災訓練に対する不安を抱きました。更に、先日本校で火災報知機が鳴るという不慮の事故が起きましたが、自分たちを含め、誰一人として避難しようとはしませんでした。このような現状を見て、マンネリ化しつつある本校の防災訓練を変えようと考えました。そこで、私たちは抜き打ちで行う防災訓練、生徒を隠す防災訓練、生徒が学校の設備を実際に使える防災訓練、地震警戒宣言が出たときの対処方法を考える、緊急地震速報が出たときの対応を考える、という五つを防災担当の先生に提案しました。最後に、はるかのひまわりについてです。昨年防災セミナーでもらったはるかのひまわりの種を花壇にまき、今年は花壇を拡張し、より多くのひまわりを咲かせることができました。以上のような活動を通じて、地域の人とのつながりや、助け合いの大切さを痛感しました。私たち高校生や若い人は、いざという時に活躍できる力を持っていると思います。その力を十二分に発揮できるように、常日ごろからボランティア意識を養っていきたいと思います。そして災害時には、どんなことでもいいので、人の役に立てるようになりたいと思います。以上です。

福和伸夫（コーディネーター） 岡田君どうもありがとうございました。抜き打ちでやる防災訓練は、とても素晴らしいと思います。それを防災担当の先生に提案したとき、先生はなんと言いましたか？

岡田智八（パネリスト） 提案したのは友人

なので、よく分かりませんが、いまだに実現はされていません。

福和伸夫（コーディネーター） そうですか。豊橋東高校の竹本校長先生、貴重な提案がありましたので、後でちゃんと考えておいてください。それから岡田君、これだけ頑張ったのだから、岡田家の防災対策はどんな具合ですか？

岡田智八（パネリスト） 岡田家の防災対策は、恥ずかしながら何もできていない状態です。

福和伸夫（コーディネーター） 岡田君、今日はお母さんと一緒ですか？どこにいますか？手を挙げてみてください。家具止めをしておりますか？しておりません？では頑張って、学校を変えるのと同時に、家庭での対策を進めてください。後でもう一度あてますから、その間に大人たちにお願いしておきたいことを考えておいてください。今までの話を聞きながら。今の岡田君たちの世代の親御さんを代表して、池田さん、学校と家庭との間をつなぐ役割として一言お願いいたします。

池田信子（パネリスト） 皆さん、こんにちは。福和先生のお話を聞いて、今、岡田君のお話を聞いて私は今とても肩身の狭い思いでここにいますけれども、いかにダメ親なんだということを本当に皆さんに発表するような形になってしまうかと思います。息子が高校3年生で、子どもたちがこのような形でできるんだということも聞かせていただいて、まず私は災害に対する意識調査から見えて来たことということで、保護者の立場についてまずお話をさせていただきたいと思います。

実は岡田さんだけでなくて、家も冷蔵庫をとめていません。先ほども話を聞いて、2階に寝室と下は広いリビングになっておりますが、2階に子ども部屋と寝室がありますので、これもそうだと、主人と一緒に建てた家ですが、ここでどうなるのかなということを思いながらおりました。本当に私たちがしっかり学んで帰ろうと思っております。

まず災害調査ですが、保護者に聞きました。これは私たちの高校のＰＴＡの役員を対象にアンケートをとりましたが、地震のニュースを見たり聞いたりしたときに、それから特集で見たときには、災害を意識すると。でも実際に災害にあったということを、体験した人は少ないですし、明日はわが身と思うけれども、実際には行動が伴っていないと話していました。それで宝陵高校には家庭クラブというものがありまして、そちらの方で、あとロビーの方で、高校の家庭クラブの活動の記録がありますので、また見ていただきたいと思いますが、こちらについてもそうです。先ほど岡田君が言ってくださったように、地震について関心があるかといったらあるのですが、何か地震対策をしているかといったら、はいと答えた人が4割ぐらいしかいませんでした。関心があるのだけれども、一歩踏み出せない。子どもの立場から言って、地震がいつ起こるんだろうと思っているし、保護者の方も子どもと無事に合えるのだろうかと本当に心配になっています。でも行動に移せない、どうしたらいいのでしょうか。

危機管理能力の問題とか、何とかなると、そういう思いがあるんじゃないかと思います。それで、考えるということは、災害が起こるであろうと予測はできていますが、実施の備えとなると十分ではなく、それが漠然とした不安を増しているのだと思います。これだけあるあるといわれても、まだ後10年ぐらいいいんだろうと、来月あるわけではないんだろうというまさかというものがなかなか日常の生活に落とし込んでいけないのだと思います。でも、何が必要か、今一度こういう機会をもらって、深く考えるべきだと思いました。しかし、親は何もやっていないわけではなくて、家庭で取り組んでいる事は様々あ

ります。市販のものを利用した工夫とか備え、それから市販品以外のものでもいろいろなことをやっています。このぐらいが家庭でできることではないのかと思います。避難場所の確認をしたりとか、家族の集合場所の確認、地震の怖さについて話し合いをするということは、家庭では取り組んでいるということです。

実際私も、このお話を頂いてから、家族でもう一度家族の集合場所、避難場所の確認をしました。でも本当にできることといえば、このぐらいなのかと思っておりました。外で見ていただくと分かりますが、宝陵高校の家庭クラブの取り組んだ防災対策ということで、手引きとかを作りましたので、皆さん後でご覧になっていただきたいと思います。それが「ぱぱっと防災リュック」になりました。チラシ袋や、グッズの制作も子どもたちがやっておりました。しかし、恥ずかしながら私はこの話を聞くまで、子どもからこういう話を聞くわけでもないし、学校から今日頂いて、初めてこうなんだと分かったぐらいでした。

ＰＴＡの組織としてできることは無いのかと、アンケートをとったときに、こんなことが挙がりました。「子どもたちが積極的にボランティアなどで動けるように学習すること」「事前に調査してすぐに招集する」とか、「地域の人たちと協力して炊き出しをする」とか、挙がりましたが、なるほどと思ったのが、地域別にまとまって、下校してくると思いますので、同じ高校に通う同じ地区の親と仲良くしておくって、なかなかこういう感覚も大事なことだと思いました。「分かりません」というものも、もちろんありましたが。そして、「自分の子どもが高校生としてできることはありますか？」という質問をさせていただきました。そうしたらやはり、「ボランティアなどができるんじゃないか」「ボランティアに参加してほしい」私も小学校、中学校ぐらいだと、子どもを守らなくてはならないというところが頭にありましたが、高校生だったら、自らこういう時に役立ってくれる人間に育って欲しいと思います。宝陵高校は、福祉・介護の専門の高校でありますので、そういう知識を実際の場面で活かしていただけるといいと親の間からは声が出ました。「大規模災害が起こったとき、学校に期待することは何がありますか？」ということには、やはり「子どもの安否を早く教えて欲しい」とか、「避難場所とか簡単な治療の場に使って欲しい」とか、「安全無事、家族の安否が確認できたら」「習っていることの実践をしてほしい」と、保護者の意見としてありました。

実は、３年生の息子の方で役を受けていますが、年子で次男がおりまして、その子が発達障害という障害を抱えております。実際災害時に、そういう子どもたちを支援するようなお仕事をさせていただいているので、その子たちはどうなってしまうのだろうと、最初に頭に浮かびます。これは中越地震の自閉症協会という、自閉症というのは見た目には分かりません。普通の顔して、普通の言葉で話したりしますが、なかなか人とのコミュニケーションがとれないという特徴を持っている子たちです。そういう子たちが災害というパニックの時に、どうなってしまうのかと思いまして、その方たちに大変なことをお聞きしました。障害児本人が地震のときに、緊急事態のときをどう捉えていたのだろうか、どんな様子だったのかということを聞きました。いつもと違う状況を理解できずに、混乱してパニックになった、揺れに対しての混乱はなかったけれども、停電になったことが分からず、テレビが見られない、ゲームができない、パソコンができないと怒った子どもがいた。後は地震の報道で不安になって、死ぬのですか？と何度も聞いてきた。これは何度も大丈

夫だと話しても、なかなか理解できないというところから来ることだと思います。地震があった後も、震度５度以上の地震がくるたびに、確率が何パーセント、普通以上に心配になってしまう、世界は破滅すると思ってしまうとのことでした。

震災にあった時の避難場所については、なかなかそういう子たちが受け入れられないということが最初から分かっていたので、自分たちの行く場所ではないと最初から諦めていたと、いうような意見もありました。それから受付の人に、障害があります、自閉症ですと言える状況ではなかったし、言っても配慮してくれるように思わなかったと。それから、この辺りが発達障害のある子たちの問題だと思うのですが、揺れてまわりが怖がっていても、状況が分からないので、本人が楽しくしているのでとても顰蹙を買ってしまったとか、そんなことで肩身の狭い思いをしたと保護者の方が言っておられました。その後の生活については、赤ちゃん返りがあったとか、濁った水を飲もうとしたとか、子どもに何かしてあげたくても親にもエネルギーがなかった。それは障害があるとかないとかそういうことではないと思いますが、そのようなことがあったとのことです。非常事態になると障害者や一番弱いところに集中すると思います。このような状況下で障害のある方への配慮がどこまで整うか、心配だと思います。

対策チームとかシミュレーションしながら、ある程度の対応ができるようにしておく。その情報を共有しておく。障害者を抱える家族だけでなく、メンタル面でも早い段階からフォローされるのが望ましいと思います。危機感を持って、普段の生活を送ることだと思いました。普段から家族がどのように支え合って生活しているのか、今一度振り返って考える、見直すいい機会だと思いました。その過程において家族で生まれてくる力、地域で生まれてくる力、学校の先生方と生まれてくる力、それが絆になってくる、それが今回のメインテーマではないのかと私は感じました。家庭で家族で向き合って、それが生活地域、学校にも発展するのではないかと思います。家庭の中から私が考えたことです。もちろん地域のネットワークとか、保護者のネットワークの充実、情報の共有化は不可欠です。でも、情報に振り回されず、それぞれの家族形態に、私の家は私の家、災害の最良の対策を確立することが大事だと思いました。この集合体が大きなネットワークにつながると思います。

地域のネットワークの中にＰＴＡという組織を使って、もっと働きかけることができるだろうと思い、この大会を契機に身近な一歩、その歩み出しが地域で始まることを期待したいと思います。まず私にできることは、明日、明後日、土日で家具を打ち付けること。これから部屋のあそこを変えようとか思いながら、他の先生の話を聞かせていただきました。以上です。

福和伸夫（コーディネーター） はい、どうもありがとうございました。今まさしく池田さんが一番良いことを最後に言ってくださいました。人前で約束するということが、一番ちゃんとやる秘訣なんですって。池田さん、もう少したくさん約束しておくと、より多くやれます。明日、明後日なんて悠長な事を言っている人は多分やらないのです。やることができる人は、今日やりますという言い方をした方が、必ずやります。ですから家具止めは明日でいいですから、今日、枕の位置を変えてください。

池田信子（パネリスト） 分かりました。

福和伸夫（コーディネーター） そのぐらいの気持ちでやってください。続くと思います。今、最後におっしゃってくださった絆と言う言葉は、とても大事な言葉だと思います。

池田さんのいろいろやらなくてはいけないリスト、どうも生き残った後にやることばかりが書いてあり、生き残らないといけないということがあまり書いてありませんでした。それは災害弱者の方々であればあるほど、まずは無傷であるということが、辛い思いをしない一番大事なポイントのような気がしますから、弱い方々こそ、事前の備えをするように、皆で協力をしていく。普段であれば、余力が一杯ありますから、絆の力でいくらでも援助ができますけれども、地震の後はなかなか、自分の事で手いっぱいなので、その辺のバランスが取れるといいかなと伺っていました。後で、もう一つ約束を考えておいてください。それでは次の番です。今のような、学生さんの気持ち、あるいはＰＴＡの方々の気持ちを受け止めながら、普通の高校の先生の立場と、日本中の高校の防災教育をリードする立場の諏訪先生という二つの顔をお持ちなので、二つの側から少しづつ話していただけると嬉しく思います。

諏訪清二（パネリスト） 分かりました。神戸の舞子高校から参りました、諏訪と申します。よろしくお願いします。神戸から来た、震災の話をしている、防災をやっていると言うと、皆さんさっと構えるんですね。何か大変つらい思いをしたに違いないとか。しかしそうでもありません。あの朝、ラジオ関西の放送を聞いていました。じっと聴いていました。本当に淡々とした放送でした。つまり、僕があの時まだ家の中にいて、マンションの部屋で安全な場所におれた立場の人間ですので、震災では自分は苦労していないのです。学校の先生がおられるかもしれませんけれど、私の学校も避難場所になりましたけれども、一週間ほどで撤収しました。唯一の苦労は、５、60センチの山盛りになったウンコを手で除去したぐらいで、これは学校の先生の仕事ですから、あと中学生と高校生と、ボランティアで一番頑張ったのは中高生ですから、その辺は覚悟しておいてくださいね。私の苦労はそのぐらいで、なんの苦労もしないまま、防災教育をやっている。皆さんから見たら、誰でもできるのかと安心感を与えているような存在じゃないかと思います。

実は、舞子高校に環境防災科、防災教育を専門に行う学科が2002年にできました。震災から７年たっています。作ろうとしたのは2000年ですから、２年間いろんな防災教育を積み上げてきて、やっと学科につながっていったと考えてください。うちの防災教育は、他とかなり違っていまして、震災の教訓を活かそう、つまり命とか思いやり、助け合いとかを中心に据えて教育することではじまっています。もちろんそれだけでは、道徳教育だけになってしまいますので、舞子高校では、一つは自然環境の視点から地震をしっかり学ぶということ、福祉の視点もあれば、行政の視点もあれば、ボランティアの視点もあれば、法律の視点もあれば、社会そのものの視点からみた防災という二つでやっています。皆さんに質問ですが、防災教育と聞いて、まず何を思い浮かべますか？消防訓練とか、避難訓練ですよね。震災のときは、死亡者の90％の方が倒れた家の下敷きになって亡くなっています。彼らは避難訓練をしていなかったから死んだのではなくて、耐震をしていなかったから死んだのです。文部科学省の防災のホームページを見てから、震度の階級が10段階あって、７とか６では人は動けなくなると書いてあります。家が壊れるかもしれないと書いてあります。動けないところで、壊れるかもしれない家に住んでいる状況では避難訓練なんて意味がないですよね。５ぐらいになると人は動けると書いてあります。家はあまり壊れないと書いてあります。

この辺りのことを考えたときに、私たち学校の先生は、避難訓練をやったらもういいと

いうようにしていましたけれども、そろそろ変えないといけない時期に来ているのかと思っています。どのように変えていっているのかと、これも福和先生の話にありました。地震に弱い家は建てたらいけないと。きちんと地震に備えるような気持ちになっていく防災教育をっかりしたいと思います。

そのために、脅しではありません。皆、我が家だけは大丈夫だと思っています。脅しではなくて、何か別の言葉でないかな、日常を良くする方法は無いかなってことをいつも考えております。一つは、防災教育という意味はもう一つあるのではないかと。一つは、消防訓練とか避難訓練とか我が身を守る訓練です。つまりサバイバーとなる防災教育です。サバイバーというのは、生き残る人という意味です。被災者という意味でもありますが、被災者というのは被害を受けた人たち、サバイバーというのは自分の主体的な生き方で生き抜いていく人たち、全然意味が違いますよね。サバイバーとなるには、いろんな勉強をしなければならないと思います。どうしたら強くなるのか、皆が住まいを建てるわけではないのですが、建築やさんにどうやって頼んだらいいのかとか、いろんなことが出てきます。これがまず一つ目ですが、ここまではあちこちの防災教育でやっています。でもそれだけではなく、その次に大事なものがあるのではないかと思います。

阪神淡路大震災の時に1年間で約137万人がボランティアに来てくれました。1ヶ月で100万人という話を聞きました。皆何をしに来たかといいますと、サポーターになりにきました。サポーターになるにも、ものすごく力がいります。例えば、こんなボランティアもいたそうです。寒いとか、こんな食べ物食べないといけないのかとか、トイレ汚いとか。そんなボランティアがいました。でも私たちは感謝しています。初心者が3日でベテランになるぐらい大変でしたから。過去の災害時の教訓をきちんと学ぶことで、よりよいサポーターになれるんじゃないのか。例えば、障害のある子どもたちは災害時にどうなるかということを過去の教訓から学んでおくことで、よりよいサポーターになれると思います。防災教育というのは、過去の災害の教訓を学ぶことですが、ただ気をつけて欲しいのが、教訓だけ学ぶだけでなく、教訓を生み出した事実も一緒に学んでください。目の前の死んでいった人間がこう死んでいったよという話を一緒に学ぶと、それは子どもたちの心の中に私はストーンと落ちてくるのではないかと思います。

それからもう一つは、阪神大震災の時は、実は私たちは何も備えておりませんでした。あのまま神戸の町が回復したかというとそうではないですよね。立ち直っていない人はたくさんいますし、それは分かっていますが、かなり復興していますよね。震災時も皆生き延びましたよね。それは日常に持っている力を転用したのではないかと。学校の先生は訓練は何もしていないでしょ。でも普段どおりできたのは、日ごろから親の文句を聞いたり、生徒の困った話を聞いたり、ということに慣れていますから、そういった力をどこかで、活用できたのではないかと思います。学校の先生だけでなくて、いろんな分野の人がいろんなところで活動しました。皆、日常持っている力を転用したのだと思います。

そう考えると、防災教育は、日常的に豊かな力をつける教育ではないかと。災害時の時だけ活躍するために身に付けるものだけじゃなくて、こんなウルトラマンみたいなことは人間にはできませんから、日常的で学校でいろんな事を楽しくやっていると、そういう人間が結局のところ、災害時の時によきサバイバーとなり、生き残った場合に、サポーターとなっていくんじゃないかと私は思います。

そのために、何が大事かといいますと、二つのキーワードを言います。一つは体験です。もう一つはネットワークです。体験というと二つあります。一つは災害体験です。防災教育は、災害体験を持っている人にしてもらいたいのです。そうすると皆さん自分は持っていないと思いますが、そうではないのです。災害体験は三つあります。一つは直接被害体験。もう一つは直接支援体験。阪神淡路で人生が変わって防災教育をやってる人がたくさんいます。彼らは、被災地の臭いとか、風とか空気とか、そういうものに触れて人生変ったのです。この二つの種類の人たちは日本の人口から見たら、ものすごく少ないですよね。それ以外の人はできないのかといえば、できるのです。何かというと、直接被害者と直接支援者から学び取る、先ほど障害者の話がでてきましたが、「聞いてみたら」という話がありましたが、その「聞いてみたら」をする人が防災教育の担い手になれるのではないかと思います。

もう一つは、子どもたちが出ていって勉強する。私はそちらも大事だと思います。ボランティアもそうですよね。ボランティアは、何も机の上でする勉強ではなく、あちこち連れて行っています。実はぼくは昨日ネパールから帰ってきたのですが、ネパールへも生徒を連れて行って防災の勉強をしますし、被災地に必ず連れて行きます。泥かきをしたり、避難所の子どもたちの声を聞いたり、お年寄りたちと話をしたりしています。そんなボランティアに高校生を連れて行っていくと、やはり彼らはすごいなと。高校生をボランティアにつれていくと「できるボランティア」ということになりますけれど、そんなんじゃないですよ。大人より高校生のほうがすごいのです。高校生は何でもできるのです。小さな子どもと一日中遊べるのです。お年寄りの話をニコニコ一日中聞けるのです。皆さんできますか？私は水害の泥かきをした次の日、体が動きませんでした。お年寄りの話を2時間以上聞いていると、ほとんど同じ話ばかり繰り返していますから、聞いていてしんどいですよね。でも、高校生はそれを全部できるのです。その子どもたちにそういった体験する場所を作ってあげるのが教師の仕事です。体験する場には絶対にネットワークが必要です。教師がそのネットワークに関与していないとうまくいかないのです。防災教育をやってから、よりよいネットワークができました。学校の先生の苦手な分野ですね。でも、いろんなネットワークを作ると、ものすごく教育の幅が広がるのです。そういうことをやっていったらいいんじゃないかと思います。以上です。

福和伸夫（コーディネーター） どうもありがとうございました。キーワードが出ました。このキーワードを皆さんがどれだけ聞き止められたかが、けっこう鍵かもしれませんが、後ほど、このキーワードは整理して、お伝えできるといいかと思います。諏訪先生は非常に献身的に防災教育をされているので、その視点で重要なキーワードをとてもたくさんおっしゃっていただきました。普通の学校の先生になったときの話をしていただけませんか？今、防災教育家としての諏訪先生の話しか分からなかったので、まだ普通の先生だったときはどうだったかを言っていただけると、まだ普通の先生だらけですから、その先生の気持ちに沿って話していただけると。

諏訪清二（パネリスト） 今も普通の先生ですよ。特別な人間ではないですよ。僕自身、震災から5年間は何もしていないです。防災教育をやろうとしたきっかけは、逃げ足が遅かったからなんです。ジョークですが。舞子高校に環境防災科をつくろうという話があったときに、どうせつくるなら、いいものをつくりたいと思ったからです。はじめるまで

は、防災教育は日ごろの訓練だと思っていましたが、そうじゃなかったのです。あれもこれもとやりだしたら、ネットワークが広がって、おもしろくなって防災教育ができるようになったのです。

福和伸夫（コーディネーター） よく分かりましたよね。やったもの勝ちという言葉がありますから、是非皆さんも防災教育なんてと思わずに、一度足を踏み入れてみると、こんなおもしろい世界は無いかもしれないと思います。さて、大変です、平川先生、すべての話を受けて、大学という一番無責任な立場で何か言わないと。

平川一臣（パネリスト） 本当にまいりました。福和先生の基調講演で、ほとんど完璧なことが皆入っていて、神戸の震災後特にお忙しくなられたと思いますが、12年たつとこんなに見事な講演をなさるのかと思いまして、尊敬しました。いろいろ重なるところはありますけれども、準備してきたものはやらなきゃならないので、やることにしましょう。私の今日の話は三つぐらい、まず地震は起こるものだということ、もう一つは、地域で地震防災マップを現実に作るということを昨年度やりまして、こういうものが必要なんじゃないかという話です。それから実際に地震防災を広げる、福和先生の話を受けるようになりますが、コーディネーターをどうやって育てたらいいのか、考えたらいいのだろうかという話をします。

今ここにいらっしゃる千人ぐらいの人の中には、理科の先生も多分いらっしゃるのだろうと思いますけれども、いろんな先生がいらっしゃって、ご父兄の方もいらっしゃるだろうと思います。こういうスライドを見たら、どう思いますか？理科年表を見たことがありますか？家庭に理科年表ありますか？高校卒業後10年たっても、理科年表がなかったら、物理の先生とか自然地理の先生は、生徒に何も教えなかったと責任があります。すごく大事だと思います。それには31ページにわたって、418の地震、5世紀以降の主な地震の一覧表が載っています。それぐらいは生徒に直ちに言えるようになっていないとまずいんじゃないですかと問いかけをしてほしいのです。ついでですけど、次は自分が住んでいる、生徒が住んでいる地域の土地の成り立ちとか自然条件などについて、古い地形図などを使って授業したことがありますか？ということも問いかけておきたいですね。

お手元の資料の中に、こういうものがあります。これは福和先生がいろいろ出されていましたが、後ろの方も前の方も何も見えないと思いますが、見えないようにしたのが私の目的です。5世紀以降どころか明治以降だけでもこんなにたくさんの地震があるのです。90年代以降にも巨大地震が起こっていまして、これでもページに入るようにかなり間引きしております。例えば、明治以降で赤いのは内陸直下型の地震、青いのは海溝型の地震です。先ほどの福和先生の話にありましたように10万5385人が死んだ関東地震だとか、奥羽三陸というのは日本で最大の津波災害ですが、2万数千人も亡くなられた地震の例を引き抜くだけでこのようになります。理科年表というのは手元に必需品だと思います。

最近では皆さんこういうのをご存知ですか？文部科学省は神戸の地震の後、地震調査研究推進本部という通称、推本（すいほん）というものを作りました。福和先生はこき使われていると思うのですが、これには主要活断層の地震の発生率だとか、全国主要110活断層のリストだとか、それから海溝型地震の発生確率だとかが載っています。その中で地震を起こす活断層は、全国でいくつあると思いますか？実は1980年に改訂になりました「日本の活断層」という飛躍的に売れた本があります。その本では2000以上、毎年書き換わります

ので3000とかありますが、3000年に一度地震が起きるかどうかの活断層が動いたとしても、毎年日本のどこかで起こることになります。毎年起こっていないということは、3000年に一回は起きないのです。神戸で起こった地震は2000年に一回ぐらいの活断層です。政府のホームページに出されている資料は、子どもにも分かりやすいように誰でも見られるようになっています。こういうものを見るのも先生方、親の役割なのかと思います。よく知られていますが、神戸の地震では6千数百人が亡くなりましたが、24時間以内に80%の人は助けられて生存できたと。3日が勝負だと言われますが、これだと2日ないし1日が勝負ですよね。2日になると一遍に生存率が30%切ってしまいます。生死を分けるのは1日です。つまり即死に近いわけです。それは助けてくれる人が近くにいるかどうかということです。つまり、校庭の中とか通学途中で地震が起きたらという意識が、先生や生徒にどれだけあるかということです。これに尽きると思います。地域によっては3分の1あるいは半分の時間は、家庭で過ごすわけですから、学校から帰ってから、あるいは夜中に地震があれば、普段からの近所づきあいがあるかないか、これが生死を分けると思います。しかし、普段何も話もしないような近所づきあい、都会的な生活では、いざという時に来てくれるのだろうか、災害に弱い社会というのは地域のつながりが薄い、ということだと思います。そこで、私自身が去年取り組んだのですが、豊橋市の私が生まれた老津町という、昔は渥美郡の老津村立小中学校だった田舎ですが、世帯数は1000軒ぐらいで、住人が約4000人ぐらいの1小学校区、そこで隣近所が一緒になって自分たちで歩いてみて、自分たちの手で1年間かけて防災マップを作ってしまいました。多分、この防災マップは日本どころか世界で初めての例じゃないかと思います。

後から分かったのですが、今回岩手内陸地震ではっきりしたのは、集落単位での防災対策とかコミュニティの意義とかがこれこそ肝心だと言うことです。地域住民一人一人が参加して作る地震防災マップをやろう。これをやったのは自治会長の鈴木さんという方で、校長先生を10年ぐらい前に辞められ、校区長になっていました。私はたまたま生まれ故郷に2、3週間に一回ずつ帰らないといけない状況にありまして、逆に言うと私も、それをうまく利用すると言うと変ですが、本当にやろうと思いました。たまたま始めたときに、ここに愛知県の方がいらっしゃると非常に嬉しいのですが、「愛知県近隣コミュニティモデルづくり事業」があり、それに応募したら、採用されて数十万円お金がついたという、こんないいこともありました。

どういうものを作ったかといいますと、ラミネート加工して下敷きを作ると思ってください。そしてこういうように10戸か15戸ぐらいの字(あざ)の中の小さな組単位で、オレンジ色は戦前に作られた家屋、黄色は1981年の耐震法ができる前の家屋、この黒いのはそれ以降の家屋を示しています。全員がそこを歩いて色を塗って、そういうものを自分たちで作りました。そして裏側は、私が歩いて、液状化するところ、津波が早く来る可能性のあるところを地図にしました。言ってみれば、“いつでもマップ、誰でもマップ、どこでもマップ”というキャッチフレーズのもとに、一家に何枚でも、一枚15円ぐらいでできますから、小学生はラミネート加工してありますので下敷き代わりに、あるいはトイレや電話台にいつでも置いておけるようにやりました。なぜそういうことをしたのかというと、豊橋市の地震防災マップが市民に配布されていますが、ほとんど使い物にならず、避難場所が書いてあるぐらいです。消火

器がどこにおいてあるかぐらいでしかありません。保存版とありますが、多分、市民の誰も保存していないと思います。典型的な行政の予算消化だと区役所の消防防災課の人に申しましたが、だからこそ自分たちで作りました。役に立たないので本当に役立つものを、どのように利用されているのか？とクエスチョンをつけていますが、本音を言うと役に立たないと書きたかったのです。

地震防災意識はどうしたら一人一人のものになるのだろうかと、最後に少しお話しします。北海道大学にコーステップ（ＣｏＳＴＥＰ）があります。これはコミュニケーター・イン・サイエンス・アンド・テクノロジー・エデュケーション・プログラムのことで、要するにサイエンスやテクノロジー的なことを教える人材を育てようというプログラムですが、それも皆さんのお手元の資料にあります。ホームページのアドレスも書いてありますので、是非一度見てみてください。非常によくできており、文部科学省が予算を付けて、東京大学と北海道大学と早稲田大学で試しに科学技術を皆のものにするため少し考えてみましょうというプログラムです。それは地震や津波の専門家、私や福和先生の立場ですね、そういう科学者と不安を持っている一般市民の方や全然興味のない人たちの間にいる人材を科学技術コミュニケーターというのですが、そういう人を育成しましょうということです。

先ほどの防災マップを作ったときには、私は専門家であると同時に科学技術コミュニケーターでもありました。私という専門家を使い、住民の不安や興味のあるところをうまく引き出して、防災マップを作ろうという役割を演じました。防災に限ってしまいますが、防災科学を広げる科学技術コミュニケーターになろうとしたわけです。コミュニケーターは専門家になれるわけではないので、専門家をたきつけて、一方では市民側に立って、専門家にこういう意見がありますよ、こういう希望がありますよと、つながりをもつ場や機会を作ってあげるのです。ここにおいでの先生方にもそういうことができる方がいっぱいいると思います。それが大事なのです。

もう一つは科学技術コミュニケーターで重要なのは、地域で、地元の研究機関やメディアだとか、行政機関だとか、ＮＰＯ、ＮＧＯのいろんな組織と連携をとって、地域の問題を扱うことです。現実には、高等学校の先生はすごく偉い先生方が多いですから、やってよと言われラジオ番組を作ってしまうとか、Ｗｅｂサイトを作ってしまう、サイエンスカフェを自分で作ってしまう、サイエンスカフェの講師になってしまう、そういうのはダメなんです。そうではなくて、科学や技術の専門的な知識、研究の内容などを一般の人々に伝える仲介をするのです。研究教育するのではないのです。一般の人々の科学や技術への不安、要望を専門家に伝えるのです、これが科学技術コミュニケーターです。先ほど私は若いころ、おつきあいのあった非常に優秀な神奈川県の校長先生お２人に、ここにおいでですが、20年振りにお会いしました。彼等は地学の研究者でもあったはずですが、彼らにはそういう義務があるだろうと実は思っています。

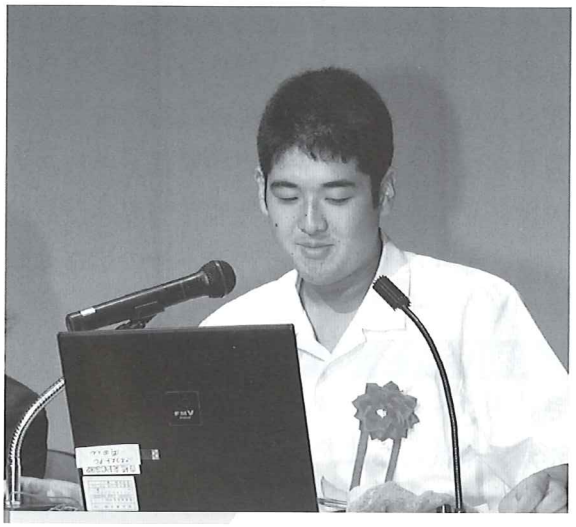
先ほどの文部省の推本（すいほん）の全国地震予測カレンダーです。これは、個人のＰＣで大きく印刷ができます。2008年と2009年にわたるカレンダーで、これを使わない手はありません。これを高校の先生がプリントして、すべての教室や廊下に掲示するとか、ラミネート加工して生徒に下敷きとして使ってもらう。あるいは親の立場から一人一人の防災マップを自分で作らないといけません。自分で作るのが大変ならば、呼びかければいいのです。先生や私を使えばいいのです。そういう役割

を担うコミュニケーターになってほしい、これが科学技術コミュニケーターなのです。

要するに今日の話のキーワードは、大規模災害と防災とネットワークですが、話題は地震の揺れ、津波、土砂災害とかいっぱいありました。自然現象としては基本的には皆同じです。場所、季節、時間によって、まったく異なる様相になっていることも、福和先生の話から分かると思います。日本各地域、通学域、居住地の自然社会条件はまったく違いますから、それぞれに応じて普段から考えて、活動するしかないです。一般論は通用しないと考えるべきです。

地震ばかり話しましたが、水災害、土砂災害、風雪災害など何でも同じだと思います。以上をまとめますと、地震はずっと起こり続けていた、これからも間違いなく起こります。学校、通学経路、家庭と周辺について自分たちで自分の防災マップを作ろう、そして基本的にこれはＰＴＡの役割だということです。地震危険度のポスターカレンダーをすべての教室に掲示して、下敷きに使う、これはＴとＰの役割です。そして、科学技術コミュニケーションに是非関心を持っていただき、ＴもＰも、自らコミュニケーターになりましょう、こういうことを最後にまとめておきたいと思います。ありがとうございました。

福和伸夫（コーディネーター） どうもありがとうございました。科学者が地域に入っていくと、こうもうまくいくのかと皆さんお分かりいただけると思います。それから平川先生のお友達がいらっしゃるようで、高校の先生はかつて研究をしていたということを忘れずに、つなぎ手としても頑張ってください。というメッセージも今拝聴いたしました。お一人ずつ、いろんなお話を聞くことができましたが、岡田君これだけ大人たちが頑張っていることを聞き、一方でこれからを生きていく岡田君、こちらとしては一生懸命頑張っている



のですが、向こうの人たちはどれぐらい頑張っているか、まだよく分かりませんが、多くの人たちに期待しながら、まだ岡田君は大人じゃないから、もう少し大人の人たちに頑張ってもらうところがあると思います。岡田君が大人の人たちにお願いすることも必要だし、自分たちでどう頑張っていくかと宣言をすることも大事だと思います。今のようなお話を聞いて岡田君どうですか？

岡田智八（パネリスト） お願いしたいことは、結構たくさんあります。

福和伸夫（コーディネーター） たくさん言ってください。

岡田智八（パネリスト） 大人の人にして欲しいことは、地震についてもっと知ってもらい、本気で考えてもらうことです。つまり、議論するだけではなく、実際に行動に移してもらわないといけないということです。できるだけたくさんの子供達に、地震が起こった際、友人を失ってしまったとか、重傷を負ったとかの経験をさせないように対策を立てていってもらいたいです。これはあまりここの人たちには関係ないかもしれませんが、政府の人たちには保存版の防災マップで予算消化するぐらいなら、耐震化についてたくさんの費用を出してもらいたいと思いました。そうすればこれから日本はもっといい国になっていくのかなと思いました。これから生きてい

く僕たちとしては、自分が生き残った場合に他の人のために役立つ人間になっていきたいという思いがあります。そのためにも、こういう高校生の時に、先生たちが私たちに、人の役に立てるようになる教育をしていただければ、そうなれると思うので、その辺をお願いしたいです。

福和伸夫（コーディネーター） ありがとうございます。耳が痛い言葉がたくさんありましたが、本気になれ、言うばかりでなく行動しろ、というような、大変重要なキーワードがありました。大人は率先垂範しなさい、ということですね。これをしっかり噛み締めながら、最後まとめていきたいと思いますが、与えられている時間が残りわずかですから、３分だけちょうだいしたいと思います。こちらに今出てきたキーワードを少し並べてみました。皆さんがおっしゃったキーワードの中で、記憶に残りそうなものを赤い色で書いてみました。

「絆」という言葉や、「皆で一緒に」「弱者」「地域」「家庭」「わが事」のようなこと、これは大事なキーワードだと確かに思いました。地域との絆、人と人との絆、家庭の中の絆もありますね、もう一つは大事な意見として、弱い人たちに対する配慮をどうするか、この点については災害の後だけでなくて、災害が起きる前の仕込みが大事だということが何となく見えてきました。それから地域と家庭が大事である、学校に任せっきりではなくて、そろそろ学校教育のせいに全部しているのではなくて、地域教育、生活教育とか家庭教育の大事さを親が認識し始めないといけないと、お話を聞いていて思いました。

それから、いくつか平川先生から我が身のこと、自分にはねかえって考えていくことのための地図作りとかありましたが、これは基本的にこのような問題を他人事としてではなくて、わが事として考えましょうということだと思います。総合コミュニケーションの問題とか、伝え手とかつなぎ手とかは、諏訪先生がおっしゃっていたネットワークそのものであるような気がします。特に、学校の先生方はつなぎ手としての役割、自分だけがしゃべるのだけではなくて、つなぎ手としての役割を果たしてくれるといいと平川先生からのご提案がありました。一番上の赤色の字をここを頑張って、口先だけでなくやれば、岡田君許してくれるでしょうか、大人たちを。いいですか？はい、じゃあ大人たちは頑張ってこれをやっていく、これをやっていくために、学校の先生方もＰＴＡの方々も、それから私たちもサポーターとしての立場の人間も一致協力してやっていけるといいと思います。その上で、岡田君たちがしっかりと生き残ってもらって、老人になっている私たちを助けてくれつつ、次の世代に更に豊な町をつないでいってくれるような役割を、是非若者たちの世代に託していきたいと思います。

これが今日、与えられた時間ですが、少しだけでも意見が言いたいという人がいたら、一つか二つだけ特別に時間をちょうだいして。どなたかいらっしゃいますか？よろしいでしょうか？いらっしゃいました？はい。

◆質疑応答

質問者１ 福島県から来ました。先ほどから貴重なお話勉強になりました。先生方よくネットワークとおっしゃいますが、オンラインのネットワークの実際的な、具体的な、一番大事なところをもっと具体的に教えていただけないでしょうか？ただ単にネットワークという言葉だけで言ってしまうと。学校と子どもと家庭で、ほどよく話し合いとそういうところの観点が普段、親ができないし、家族ともうまくできないし、そういうことが一番大事かと思います。多分そういうことを言っているんだと思うのですが、ネットワーク上

の支部を作ったらいいのじゃないかと思います。

福和伸夫（コーディネーター） 今の質問に一つ一つ答えていたら、事務局にしかられてしまいますから、後で答えを先生方から特別に収集してください。今おっしゃったネットワークという言葉は、皆さん同じ思いでお使いになっていると思います、基本的には人間と人間との間でちゃんと会話できる関係をつくっていくということで、お使いになっていると思います。今のような人の見える関係があれば、誰と誰が手を携えているかということが分かる地図が、地域ごとにできることになると思います。むしろ先生方も一緒にどことどこがつながっているかを明示的にしていただければいいかと思います。それは教訓として受け止めながら皆でやっていこうと思いますが、それでいいですか？

質問者１ はい、分かりました。

福和伸夫（コーディネーター） 池田さんがおっしゃったように約束をすることが次につながることとおっしゃいましたが、カメラマンの方がいらっしゃいましたよね。カメラを持って前に来ていただけますか？最後に約束をしたいと思います。本当に今日大事だと思った、今日中に何か一つでもいいから行動を、その一つは何でもいいですし、机を変えるでもいいし、枕の位置を変えるでもいいし、家具を止めるでもいいと思いますが、何か一つでもやろうと、カメラマンさんがいてくれるので、証拠写真を撮りたいのですが。カメラはありませんか？それでは自分のカメラでとります。何でもいいから、絶対何かやると思った方、手を挙げてください。はい、ありがとうございます。それぞれの方の座っている位置も把握して証拠写真を撮りましたので、是非皆さん行動に移していただけたらと思います。一つの行動はどんどん伝染していきますので、そうすればとても安全な町をそれぞれの学校で作っていけると思います。これでこのパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。４名のパネリストの方に、お礼の意味もこめて、拍手をして終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

河村美知代子（司会） 大変熱心なご協議ありがとうございました。時間になりましたので、これでパネルディスカッションを閉じたいと思います。今、福和先生からお礼の言葉がありましたけれども、私からも申し上げたいと思います。コーディネーターの福和伸夫様、大変熱心で盛り上がった円滑な進行をしていただきまして、大変ありがとうございました。またパネリストの平川一臣様、諏訪清二様、池田信子様、岡田智八さんには貴重な意見を頂き、おかげで有意義な分科会となりました。ありがとうございました。

これでパネルディスカッションの方を閉会とさせていただきます、どうもありがとうございました。それでは、閉会の言葉を進行責任者愛知県立作手高等学校ＰＴＡ会長今泉延茂が申し上げます。

◆閉会の言葉

今泉延茂（進行責任者） 皆様長時間にわたる協議お疲れさまでした。以上をもちまして、第58回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会愛知大会特別第２分科会を閉会します。ありがとうございました。